

若者中心による地域密着型イベントの創出

—岐阜県多治見市での「TAJIMI-ISM」について—

米崎 寿行

(博士前期課程 2007年3月修了)

はじめに

筆者は総合政策科学研究科在学中よりミュージシャンとして音楽活動を行い、修了後の2007年4月より岐阜県多治見市に居を構えて、活動を継続している。なお、修士論文のタイトルは「青少年の居場所づくりについての一考察」であった。

その多治見市で筆者は2007年7月22日に地元密着型コンサートイベント「TAJIMI-ISM」を開催した。このイベントは地元で活躍するアーティストや高校生を集め、多治見市の活性化を狙ったものである。今回は「TAJIMI-ISM」についてイベント設立のきっかけから開催に至るまでの経緯および多治見市の現状の一端を報告する。

1. きっかけ

今回のイベントが開催されるきっかけとなったのは筆者が所属するバンド「Lack Of Common sense」(以下、LOC)と地元高校生との出会いである。2007年2月にLOCがJR多治見駅前にて弾き語り路上ライブを行った際に数人の高校生が立ち寄った。当初は世間話程度の会話を交わっていたのであったが、話が進んでいく中で高校生たちが通う学校で、文化祭でのライブ演奏が禁止になったという話が出てきた。彼らは学校側の禁止措置を撤回すべく、校内で署名活動を行い学校側に提出したものの、決定は覆ることはなかったという。しかし、高校生たちのバンド演奏をしたいという思いは強く、そこで我々LOCが主催者となってコンサートイベント

を開くということになった。

イベントを開くにあたって最も配慮したのは、イベントを単に自分たち身内の範囲の規模で行うのではなく、多治見市全体を盛り上げるものにしよう、ということであった。というのも現在、多治見市は、その中心商店街である「ながせ通り」がいわゆるシャッター通りになってしまっていることに象徴されるように、市全体として衰退の傾向にある。我々が出会った高校生も学校外での表現の場がなかなか見つからないという問題を抱えており、そのために、市外へと表現の場を見出していくようになっている。そこで、今回のイベントを多治見市再生・活性化のきっかけになるようなものにしようということとなった。

そこで今回のイベントには、多治見市をはじめ、土岐市や御高町など東濃地区で活躍するミュージシャンたちにも出演してもらうことになった。またさらに、ダンスチームにも参加してもらうこととなった。このダンス・スクールは多治見駅前で開催されているダンススクール「CoCo」の受講生と講師で結成されたチームである。イベント名も「TAJIMI-ISM」と命名した。

2. イベント開催まで

イベントを開くにあたってまず問題となったのが会場探しであった。多治見市にはライブハウスがないため、公共施設を借りることにした。しかし、今回のイベントは全て自分たちで作り上げていかなければならないため、大規模な会場では利用料金含め、現実的ではなかった。考慮した結果、多治見市豊岡町にあるまなびパー



2007年7月20日付 中日新聞 東濃版 より抜粋

ク（多治見市学習館）の7階にある多目的ホールが観客スペースの広さ、利用料金ともに妥当であるということになった。しかし、ここで問題が浮上した。まなびパークでは多目的ホールでライブ演奏を行った高校生の不祥事により、数年前からライブ演奏が禁止となっていた。筆者はまなびパークに何度か掛け合い、今回のイベントの趣旨を説明し、まなびパークの職員である宮嶋浩氏の協力のもと、多目的ホールの使用許可を得ることができた。

次に、運営費についてであるが、これについても自分たちだけでは到底まかないきれないので地元の飲食店等から協賛を得ることにした。協賛店からは費用の援助だけではなく、イベント自体への後援もいただいた。

以上のように会場と資金の準備が整ったところで、広報に注力し始めた。今回のイベントが身内回りだけで完結するのではなく、多治見市全体に広く伝わるように地元ラジオ局や新聞社に宣伝してもらうよう掛け合った。特に新聞社は反応が良く、取材を行っていただいたとともにイベントについて大きく記事を取り上げてくれた。また、自分たちで今回のイベントに関するフリーペーパーを作成した。その中には今回のイベントの出演者や協賛店の情報に加え、多

治見の現在の声として、まなびパークの職員である宮嶋氏、LOC、ダンススタジオ「CoCo」の講師であるTAKUYA氏で対談を行い、その内容を記載した。出来上がったフリーペーパーは多治見市内の様々な店舗に置いてもらい、また街頭での手配りも行った。

3. イベントの実際

当日、イベントには266人の観客が来場した。大半は高校生など若い世代が中心であったが、中には新聞の記事を見てやってきた50代の女性など年齢幅が広く来場した。予想以上の観客動員数であったが、当日、10人ほどのボランティアスタッフがホールへの誘導などを担当してくれたため、大きな混乱にはいたらなかった。また、出演者側も当日は未成年者の喫煙などの不祥事がおこらないよう館内および館外を見回った。会場設営も出演者およびスタッフ全員で自力で行った。今回のイベントは、自分たちで手作りで、自らの責任で、実現していくのだという趣旨が出演者にも浸透していたと言える。このライブ・イベント「TAJIMI-ISM」は、観客も出演者も満足する大盛況のうちに幕を閉

じた。

4. 総括

イベント終了後、観客にアンケートを配り、今回の「TAJIMI-ISM」の感想を聞いてみた。すると、若い世代を中心に「やる気が出た」「自分も何かやろうと感じた」という意見が多かった。また、「次回もぜひ開いてほしい」との声が出演者側とともに挙がった。観客および出演者に今回のイベントの趣旨が伝わった結果がこうしたアンケートの回答に表れたものと推察している。とはいえ、一方では、今回のイベントの趣旨がなかなか伝わらず、問題にぶつかった場面もあった。例えば、協賛店の募集が当初、思うように進まなかった点である。その理由は、やはり行政ないし公的団体主催で行うイベントではないため、信用性に欠けていたということである。また、若者中心のイベントであることから危険ではないか、という指摘も受けた。今回のイベントは結果的には大きなトラブルもなかったが、今後はイベントの安全性および公開

性の確保には一層の配慮が必要となるだろう。

最後にこのイベントを通じて知った行政側と住民側の意思疎通の困難さについて触れて本報告を閉じたい。フリーペーパー作成時に行った対談の中で、宮嶋氏から、行政側の取り組みとして高校生対象のイベントを実際に企画することもあるが、なかなか人が集まらないという問題を抱えているという発言があった。今回のイベントがその高校生たちがライブ演奏をする場がないという不満から始まっているだけに、青少年側と行政側でのすれ違いというものを感じた。宮嶋氏は、高校生のやりたい事をやれるような環境を作っていきたいと言う。そのような宮嶋氏の思いを実現していくためには、高校生をはじめ若い市民と、多治見市の関係機関、学校を含めた各種団体、商工会など、多治見市という公共空間を仕切っている主体との恒常的なコミュニケーション回路が設け、効果的に機能させ、できれば多治見市の活性化に向けて両者が協働していくような機会と場が創出されることが必要になるだろう。向後、「TAJIMI-ISM」が若者と行政をつなぐ協働の架け橋になるように努力していきたい。



2007年7月22日 「TAJIMI-ISM」出演者およびスタッフ集合写真